

## 出エジプト記23章「約束の地への準備」

### 1A 公正な裁判 1-8

### 2A 出エジプトの民 9-19

1B 寄留者や貧しい者への憐れみ 9-13

2B 主に対する収穫祭 14-19

### 3A 約束の地を相続する民 20-33

1B 道中の守り 20-26

2B カナンの民の追放 27-33

## 本文

出エジプト記 23 章を開いてください。私たちの学びは、モーセがイスラエルの民に、神の定めを与えているところです。主がシナイ山に降りて、十の戒めを与えられました。それから、イスラエルが約束の地に入って、そこに住み着き、旅をしている集団としてではなく、国民として生きていくこととなりますが、その時に、裁き司が必要となります。イスラエルが国民として秩序をもって生きていくには、神が治めているその統治が、生活の隅々まで行き届かなければいけません。それでもって、初めて平和が満ちあふれます。

そしてその内容は、既に与えられた十戒に基づいたものです。十の戒めは、私たちが律する教えであります。何か問題が起こった時にどのようにしてその教えをもって裁くのか、それを教えているところです。21 章には、主に殺してはならないという戒めに基づいた事例があります。22 章には、盗んではならないという戒めに基づいて、様々な事例があります。神の公正さが、隅々にまで表れています。私たちも、聖書の教えを原則としてたくさん聞いていますが、それを具体的に互いの間に、教会の中にどのように当てはめていくのか、知恵が必要です。そのことを学んでいってみましょう。

### 1A 公正な裁判 1-8

23 章の初めの 8 節は、裁き司がその判断が曲げられないようにするための戒めです。「偽りの証言をしてはならない」という十戒の戒めに関することです。

1 偽りのうわさを口にしてはならない。悪者と組んで、悪意のある証人となってはならない。2 多数に従って悪の側に立ってはならない。訴訟において、多数に従って道からそれ、ねじ曲げた証言をしてはならない。3 また、訴訟において、弱い者を特に重んじてはいけない。

何かを判断する時に、私たちの間には「偽りの噂」が飛び交います。それがどこから来ているか

という、「悪意」から来ています。誰かと対立したり、争いになっている時は、そこには敵意が生じています。ですから、自分に都合の良い情報のみを集め、それに基づいて偏ったことを証言します。偏ったことだけなら、まだましなのですが、時に事実そのものを捻じ曲げ、事実ではないことまで言いふらします。これを「中傷」と呼びます。

私たちは、依怙鼻頂してしまう弱さを持っています。目で見ているものに従って判断してしまい、その真実を知らないのに、その奥にあることが違うかもしれないということを思わずに、判断する傾向があります。ヤコブの手紙には、「2:1 あなたがたは、私たちの主、栄光のイエス・キリストへの信仰を持っていながら、人をえこひいきすることがあってはなりません。」と言って、自分たちの集會に金持ちの人と、貧しい人が来て、案内する席に差別があることを強く戒め、「2:4 自分たちの中で差別をし、悪い考えでさばく者となったではありませんか。」と叱責しているのです。

そして、私たちが欺いてしまう罪があります。それは、「多数に従って悪の側に立」つということです。多数が信じていることには、力が生じます。いわゆる「空気」のようなもの、同調圧力のようなものが出来上がります。生まれつき盲目の男がイエス様によって癒されましたが、主が癒されたのが安息日だったので、ユダヤ人指導者はイエスを罪に定めようとしてきました。けれども、元盲人は大胆にもイエス様を擁護しました。彼の両親が連れて来られました。同じ尋問をすると、彼らは、どうして目が開いたのか、誰が開けたのか知らないと言いました。「ヨハネ 9:22 彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた。」ユダヤ人の共同体から追放されると恐れて、真実を両親は語りませんでした。同じように、多数の者たちがそうだとやっているからといって、それで真実だと知っていることを言い逃れすることは、間違っています。

また、3 節には注意があります。「弱い者を特に重んじてもいいけない」であります。弱いということだけで、その人のしたことを正当化してしまう過ちもしばしば起こります。人は被害者を装うことさえできるのです。弱者であることをむしろ盾にして、自分のしたいことをしていくという罪深さも、人間は持っています。ですから、そういったことから自由にはされていないといけません。

4 あなたの敵の牛やろばが迷っているのに出会った場合、あなたは必ずそれを彼のところに連れ戻さなければならない。5 あなたを憎んでいる者のろばが、重い荷の下敷きになっているのを見た場合、それを見過ごしにせず、必ず彼と一緒に起こしてやらなければならない。

ここで言っているのは、主に、訴訟相手のことです。訴訟中の相手側の家畜が、このように困っている時に、その憐れみの手を控えることはしていけないと命じています。私たちの傾向として、「坊主憎けりや袈裟まで憎い」というものがあります。誰かを憎めば、その人に関わる全てのことが憎くなるということです。けれども、公正に生きるためには、憐れみの手をどんな時であっても指し

伸ばすということです。新約聖書には、「ロマ 12:17 だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人が良いと思うことを行うように心がけなさい。」とあります。

6 訴訟において、あなたの貧しい者たちへのさばきを曲げてはならない。7 偽りの告訴から遠く離れなければならない。咎のない者、正しい者を殺してはならない。わたしが悪者を正しいとすることはしない。8 賄賂を受け取ってはならない。賄賂は聡明な人を盲目にし、正しい人の言い分をゆがめる。

ここでは、裁判における富の力の話をしています。現代においては、訴訟において金のあるほうが勝ちます。優秀な弁護士を雇って、裁判に臨めば、やった悪いことも悪いことをしなかったと、裁きを曲げることさえできます。当時、そういったことが多発していました。賄賂が回って来ます。あるいは、自分に待遇を良くしてくれるようなことを、訴訟の当事者がしてくるようなことがあります。それで、どんなに聡明な人でも盲目になってしまうのです。

お金のこと、またいろいろな影響力は、私たち教会もなかなか、脱皮することはできません。献金を多くしている人は、自分の言い分が教会で聞いてもらうとすることがあります。献金は、惜しみなく捧げるからこそ神が愛されるのであって、ひも付きであってはいけないのですが、そうってしまうのです。またよく奉仕してくれる人が、自分のしたいことを聞いてもらう梃子にします。そうすると、どうしてもその言い分を聞いてしまう誘惑があるのです。

## **2A 出エジプトの民 9-19**

ここで、個々の訴訟についての定めは終わります。次から、約束の地に入って、その定住してからの食物について、また収穫についての教えがあります。

### **1B 寄留者や貧しい者への憐れみ 9-13**

9 あなたは寄留者を虐げてはならない。あなたがたはエジプトの地で寄留の民であったので、寄留者の心をあなたがた自身がよく知っている。

このことは、主が十戒を与える時にも、また 21 章からの定めを語られる時にも、初めに語られていることであります。寄留の民であり、また奴隷でもあったので、あなたがたはそこから解放されたのだから、同じように憐れみ、解放してあげなさいという命令です。これはとても大切な恵みの原則です。私たちが、罪の中にいたのにキリストが私たちを愛し、罪から解放してくださった。だから、私たちも他の人々を愛して、その人が救われるように願うということです。また、憐れみを受けたのだから、他の人たちにも憐れむのだという循環です。神の愛の中にいる者が、兄弟を愛し、隣人を愛するということです。

そして、苦しみというのは、苦しみを受けた者だからこそ慰めを与えることができます。「Ⅱコリ 1:4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。」私たちが苦しみを受けたのは、それは神の命令を知るためであると詩篇に書かれていますが、それだけでなく、その苦しみの中にいる人を慰めることができるためなのだ、ということです。

10 六年間は、あなたは地に種を蒔き、収穫をする。11 しかし、七年目には、その土地をそのまま休ませておかなければならない。民の貧しい人々が食べ、その残りを野の生き物が食べるようにしなければならない。ぶどう畑、オリーブ畑も同様にしなければならない。12 六日間は自分の仕事をし、七日目には、それをやめなければならない。あなたの牛やろばが休み、あなたの女奴隷の子や寄留者が息をつくためである。

これは、安息年とも言われる戒めです。週に一日、休みなさいと命じられているだけでなく、七年の一度、一年の間、土地を休ませなさいという命令であります。レビ記に、また申命記にも同じ戒めが書かれていますが、ここでは、先に主が語られている、貧しい人たちのことを思って、また家畜のことを思って、この戒めを与えられているということが分かります。一つは、彼らが労働から解放されるためです。絶えず労している人たちが、また家畜が、息をつくことができるようにするためです。私たちにも必要ですね、主のためであるとして一生懸命、奉仕をしても、息をつくことがとても必要です。それから、「収穫の残りを食べるようにする」というのも、もう一つの目的です。あえて、収穫の畑の四隅を刈り取らないようにしなさい、落ち穂をそのままにしておきなさいという命令が、他の箇所にあります。そうすることによって、畑で労する人々や家畜がその分け前に少しあずかることができるようにするためです。このことも、新約聖書には霊的な原則として書かれています。主のために労している人々が、物質的なことについても報いを受けることができるようにしなければいけない、と定めています。

13 わたしがあなたがたに言ったすべてのことを守らなければならない。ほかの神々の名を口にすることはならない。これがあなたの口から聞こえてはならない。

主が、収穫における戒めを与えておられますが、次に、「ほかの神々の名を口にすることはならない。」に移っています。ここが大事な背景ですが、イスラエル人はカナン地に入ります。そこに住んでいる人々は、偶像礼拝をしています。それらは、収穫や多産に関わるものが多くあります。バアルは、雨を降らせるなど、天をつかさどる神として崇められ、農業においては主人のような存在です。アシュタロテは、豊穡多産の女神です。たくさんの子が生まれ、また家畜も多産になるように、また土地が豊かにされるようにと祈念する神です。収穫であれば、これらの神々への信仰が根付いているので、彼らの間でその神々の名が唱えられることのないように、という戒めです。

## 2B 主に対する収穫祭 14-19

そこで、主は、収穫に関わる祭りを定められます。収穫による実を、しかるべき相手に捧げる祭りです。そう、収穫はバアルでもアシュタロテでもなく、主ご自身がもたらされるものです。

14 年に三度、わたしのために祭りを行わなければならない。15 種なしパンの祭りを守らなければならない。わたしが命じたとおりに、アビブの月の定められた時に、七日間、種なしパンを食べなければならない。それは、その月にあなたがエジプトを出たからである。何も持たずにわたしの前に出てはならない。

例年行なう、三大祭りを定めておられます。種なしパンの祭りがその一つです。実は、たった今、種なしパンの祭りの最中です(2019年4月24日)。「アビブ」の月というのは、ニサンとも呼ばれますが、アビブは「青い穂」を意味します。作物に実が結ばれ始めている時であります。具体的には、大麦の穂が実を結び始める月です。その時には、七日間、種なしのパンを食べます。イースト菌の入っていないパンのことです。私たちの教会で使っている、マツツアはまさにユダヤ人の人たちが使っている、マツツアと呼ばれる種なしパンです。過越の祭りは、この種なしパンの祝いの初日に行うものとして、しばしば、種なしパンの祝いと一括りにされています。

それを行うのは、「あなたがエジプトを出たから」だとあります。ここにも出エジプトという神の恵みに対しての、彼らの応答が書かれています。礼拝とは何か？また、なぜ礼拝するのか？を考えますと、礼拝とは、「主なる神に捧げること」であります。時間を捧げ、財産も捧げます。とかく、自分が受けるところだと思いがちですが、礼拝というのは、その名のとおり、捧げること、礼を尽くすところであり、王なる神に貢物を持って来て、拝礼することに他なりません。そしてなぜ、そんなことをするのか？なのですが、これは神と交わるため、と言ってよいです。神が私たちが救われるために必要なことを全てしてくださり、今もしてくださっています。その恵みの中に留まるのは、私たちが神に捧げることによって応答して、留まることができるのです。神の恵みは一方的であります。その恵みを恵みとして味わうためには、感謝と賛美のいけにえ、喜びのいけにえを捧げ続ける必要があるのです。

16 また、あなたが畑に種を蒔いて得た勤労の初穂を献げる刈り入れの祭りと、年の終わりに、あなたの勤労の実を畑から取り入れるときの収穫祭を行わなければならない。17 年に三度、男子はみな、あなたの主、【主】の前に出なければならない。

三つの祭りのうち、次は小麦の収穫の初穂を献げる祭りであり、五旬節です。七週の祭りとも呼ばれます。これが収穫の始まりですが、収穫の終わりは秋に来ます。その時には、仮庵の祭りが行われます。細かいことを言えば、レビ記 23 章には七つの祭りが記されていますが、この三つの祭りの前後に行われるものです。そして、これらの祭りには男子は出て行かなければいけ

ないという戒めがあり、そのためにイエス様が十字架に付けられた時の過越の祭りは、世界中からのユダヤ人が集まっていて、聖霊が降った五旬節にも、世界中からのユダヤ人がエルサレムに集まっていたのです。

これらの祭りについて、新約聖書では、霊的な意味合いをもって説明しています。今、話しましたように、種なしパンの祝いの時にイエス様が十字架に付けられ、三日目に甦られました。そして五旬節の時に、聖霊が降りました。それから、主はご自身が戻って来られて神の国が建てられた時には、大いなる祝宴をすることを予告され、ゼカリヤ 14 章には御国において仮庵の祭りが祝われることが預言されています。そして新約聖書には、キリスト者が信仰によって歩み、聖霊に導かれて歩む中で、実を結ぶことが書かれています。つまり、これらの祭りは、「キリストの働きと、それによってもたらされる、霊的な果実」を表しているのです。

キリストが死なれて、甦られ、それですべての罪と悪が取り除かれたことを、種なしパンは表しています。七は完全数ですから、神が完全に罪を取り除いてくださったのです。それから聖霊が五十日後に注がれたことを五旬節が示していて、それから主が再び戻って来られて、万物が主の願われるように回復したことを祝うのが、秋の収穫祭である仮庵の祭りなのです。

18 わたしへのいけにえの血を、種入りのパンと一緒に献げてはならない。また、わたしの祭りのための脂肪を朝まで残しておいてはならない。19 あなたの土地の初穂の最上のものを、あなたの神、【主】の家に持って来なければならない。あなたは子やぎをその母の乳で煮てはならない。

主が、祭りにおいて捧げる物についての注意を与えておられます。初めの、「種入りのパン」とありますが、種は取り除かなければいけないことを教えておられます。脂肪ですが、これは神の豊かさを表しています。豊かさは、神に属していることを知るために脂肪は食べてはいけません。次も、主に対する礼拝の姿勢をよく表しています。最上のものを献げるのです。残り物を捧げてはいけないことは、他の箇所でも戒められています。主が最上のもの、御子をお捧げになったのですから、私たちも最上のものをもって捧げます。しばしば私たちは、「余暇に主に捧げよう」と考えます。順番が間違っています、「主に捧げ、それから残りを自分が楽しむ」という順番です。

そして、「あなたは子やぎをその母の乳で煮てはならない。」というのは、収穫にまつわる異教の慣わしに関することです。当時、カナン人たちのならわしで、子やぎをその母親の乳で煮るという行為がありました。異教のならわしを真似てはいけない、ということと、また母の乳で子を煮るといふ残酷なことをしてはいけない、という両方の意味が含まれています。

この定めから、ユダヤ人は厳しい食物規定を設けました。それは、肉製品と乳製品を同時に食事の中で取ってはいけない、というものです。ですから、ステーキを食べて、食後にコーヒーを読む

ときに、クリームを入れてはいけないということになり、実際に多くのユダヤ人がその掟にしがたっています。また、チーズバーガーは食べません。乳製品と肉製品の組み合わせだからです。けれども、これは私の友人のユダヤ人の兄弟が言っていましたが、創世記にて、アブラハムとサラが三人の旅人を招いたとき、凝乳と子牛をほふったものをもって、もてなしている場面が出てきますが、凝乳とはヨーグルトのことです。初めのユダヤ人であるアブラハムが、主の使いに肉製品と乳製品の食事を同時に出しているのだ、ということです。

### **3A 約束の地を相続する民 20-33**

こうやって主は、ご自分の定めを与え、また収穫についての教えを与え、それからこれから約束の地に入る時に、ご自分の守りを与えられることを約束されます。

#### **1B 道中の守り 20-26**

20 見よ。わたしは、使いをあなたの前に遣わし、道中あなたを守り、わたしが備えた場所にあなただを導く。21 あなたは、その者に心を留め、その声に従いなさい。彼に逆らってはならない。わたしの名がその者のうちにあるので、彼はあなたがたの背きを赦さない。

神が、ご自分の使いを遣わして、彼らが約束の地に入る時に導いてくださるということです。聖書には、天使であるとか、御使いであるとか書かれていますが、その中でもこの使いは特別な存在です。「わたしの名がその者のうちにある」ということで、主の使い自身の中に主ご自身がおられるということで、単なる人でもなく、また御使い以上の存在であり、主なる神と一体になっている存在だということです。

この使いが、はっきりと前面に現れるのは、ヨルダン川を渡ってエリコを偵察にヨシュアが行った時でした。ヨシュア記 5 章 13 節からお読みします。「13 ヨシュアがエリコにいたとき、目を上げて見ると、一人の人が抜き身の剣を手にとって彼の前方に立っていた。ヨシュアは彼のところへ歩み寄って言った。「あなたは私たちの味方ですか、それとも敵ですか。」14 彼は言った。「いや、わたしは【主】の軍の将として、今、来たのだ。」ヨシュアは顔を地に付けて伏し拝み、彼に言った。「わが主は、何をこのしもべに告げられるのですか。」15 【主】の軍の将はヨシュアに言った。「あなたの足の履き物を脱げ。あなたの立っている所は聖なる場所である。」そこで、ヨシュアはそのようにした。」この方は、主の軍の将として現れました。そしてヨシュアは、主ご自身として伏し拝んでいます。それから、覚えていますか、主ご自身が燃える柴の中でモーセに現れた時に、全く同じ言葉、「あなたの足の履き物を脱げ。あなたの立っている所は聖なる場所である。」と言い表しておられたのです。そこでも、出エジプト記 3 章 2 節に現れたのは「主の使い」とあります。主は、このようにして、ご自分を完全に表す使いを遣わされるのです。

イエス様が、弟子たちに対して何度となく、神ご自身を「わたしを遣わした方」と呼ばれました。

「ヨハ 5:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。」神が遣わされた方は、神ご自身と一つであり、この方を信じる者は永遠のいのちを持つというまでも権能が与えられています。そうです、主がモーセによって約束された、主が遣わされる使いは、イエスご自身です。イエス様は、約二千年前にベツレヘムで人としてお生まれになりましたが、世の初めからおられる方であり、主に遣わされた方としてイスラエルの民の間にも現れてくださったのです。イエス様は、ご自身をアブラハムが見た主ご自身として、またモーセの前に現れた「わたしはある」という方として、ユダヤ人に話しました(ヨハネ 8:56,58)。

その声に聞き従いなさい、背きを赦さないという、強い言葉で警告していますが、それはこの方が主の軍の将だからです。もし背けば、それは軍全体の命を落とすことにもなりかねません。思い出すのは、カインです。彼が聖絶のものを欲しがったので、多くの者がアイでの戦いで命を落としてしまいました。

22 しかし、もしあなたが確かにその声に従い、わたしが告げることをみな行なうなら、わたしはあなたの敵には敵となり、あなたの仇には仇となる。23 わたしの使いがあなたの前を行き、あなたをアモリ人、ヒッタイト人、ペリジ人、カナン人、ヒビ人、エブス人のところに導き、わたしが彼らを消し去るとき、24 あなたは彼らの神々を拜んではならない。それらに仕えてはならない。また、彼らの風習に倣ってはならない。それらの神々を徹底的に破壊し、その石の柱を粉々に打ち砕かなければならない。

主が、イスラエルの味方になってくださいます。彼らの敵の敵になってくださり、仇の仇になってくださいます。この約束は、キリスト者にも恵みによって与えられています。「ロマ 8:31 神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」

しかし、警告があります。主が圧倒的な勝利を与えられますが、それは、主が、彼らが正しいからではなく、彼ら自身に咎があり、忌まわしいことを行っているからだということを、申命記などで主は語られます。つまり、彼ら自身の拜んでいる神々を自分たちも拜むのであれば、彼ら自身が神の裁きの対象になってしまうのです。これは、私たちに与えられている救いについても同じです。主が私たちの味方になってくださるのは、あくまでも私たちが罪から救われるという神のご計画の中でそうなのです。ですから、罪から離れる、肉の行いを殺すということにおいて、初めて神の救いの力強さを経験するのであって、罪にとどまり、肉の行いをしているのであれば、神が私たちを救われた意味がなくなってしまいます。

25 あなたがたの神、【主】に仕えよ。そうすれば、主はあなたのパンと水を祝福する。わたしはあなたの中から病気を取り除く。26 あなたの国には、流産する女も不妊の女もいなくなる。わたしは

あなたの日数を満たす。

ここに書かれている、祝福は、これらの神々がもたらすものとして語られているものです。パンと水の祝福、病気が治ること、また流産や不妊がなくなる、また長寿など、これらのことはカナンの神々も約束していることです。しかし主は、それらの神々に仕えてはならない、「あなたがたの神、【主】に仕えよ。」と言われているのです。そして、イスラエル人の生活の中でも必要とされる切実なこと、パンや水、病気、また流産や不妊も、主が加えて与えられるということです。これは、イエス様に仕えるために、世のものを捨てる者たちに約束してくださったことでもありますね。「マル 10:29-30 わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者は、今この世で、迫害とともに、家、兄弟、姉妹、母、子ども、畑を百倍受け、来たるべき世で永遠のいのちを受けます。」

## 2B カナンの民の追放 27-33

27 わたしは、わたしへの恐れをあなたの先に送り、あなたが入って行く先のすべての民をかき乱し、あなたのすべての敵があなたに背を向けるようにする。28 わたしはまた、スズメバチをあなたの先に遣わす。これが、ヒビ人、カナン人、ヒッタイト人をあなたの前から追い払う。

恐れというのは、戦いの時に大敵です。恐れを恐れる、という名言がありますが、恐れると人は罨に陥ります。「箴 29:25 人を恐れると罨にかかる。しかし、【主】に信頼する者は高い所にかくまわれる。」ここの「高い所にかくまわれる」という言葉は、高い絶壁ところにある、その岩穴にかくまわれている鷲の子どものようなイメージです。イエス様が、ペテロが三度、ご自身を知らないと言った後、「ヨハ 14:1 あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」と言われました。

その戦いにおいて、主は敵に対して恐れという武器を与えます。ヨシュア記に、エリコの住民が恐れおののいていることが、遊女ラハブによって報告されました。ギブオン人も、イスラエル人を恐れて、変装して彼らと盟約を結ぶことを選びました。主に信頼し、主に聞き従う時に、敵のほうは恐れ退きます。

「スズメバチ」と訳されているのは、カナン人にとってはエジプト軍のことを思い出すことでしょう。エジプトやアッシリアの文書に、敵軍がやってくる前に襲ってくる神々として登場します。カナン人は、かつてメギドの戦いによってエジプトに徹底的に打ちのめされたことがあります。そのような存在としてイスラエルの軍をみなすようになるということです。これはとても興味深いことです、なぜなら、イスラエルの軍隊はちょっと前は奴隷出身であった者たちであり、荒野を放浪していた羊飼いのような民であり、それに対してカナン人は大変、文明が発達していた民だったからです。

29 しかし、わたしは彼らを一年のうちに、あなたの前から追い払いはしない。土地が荒れ果て、野の生き物が増え、あなたを害することのないようにするためである。30 あなたが増え広がって、その地を相続するまで、少しずつ、わたしは彼らをあなたの前から追い払う。

主が着実に、約束の地を相続することができるように、急な征服はさせないように配慮しておられます。急に攻め入ると楽なように見えますが、実はそうでもありません。現代のイスラエルとパレスチナの紛争でも、六日戦争で一気に領土が四倍になったのですが、そのためにどうやって攻め取った地を管理すればよいのか悩みの種になったからです。徐々に追い払うということには、知恵があります。

これはキリスト者の歩みと同じです。私たちの目標はキリストのようになることですが、御霊がその似姿に変えていってくださいます。だったら、一度に変えてくれればよいのに、と思ってしまいますが、もし肉の領域を一気に見させられたら、たぶん私は気絶してしまうでしょう。キリスト者になったばかりのときに平気だったことは、今考えると、かなりやばいことだったのですが、その時に主はその肉の領域を見せないで、今になって見せてくださっています。徐々に、なのです。

31 わたしは、あなたの領土を、葦の海からペリシテ人の海に至るまで、また荒野からあの大河に至るまでとする。それは、わたしがその地に住んでいる者たちをあなたがたの手に渡し、あなたが彼らを自分の前から追い払うからである。

主の約束されている地は、彼らの思いをはるかに超えた広大なものであったことでしょう。アブラハムがかつて約束されていました。「創世 15:18 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。『あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。エジプトの川から、あの大河ユーフラテス川まで。』南北にはエジプトにある川からユーフラテス川まで、地中海に面するところからヨルダン川まで、という領域です。主は、このことを後世に何度となく言及されます。ソロモンの時代に、この領域に近づきました（I 列王 4:21）。しかしそれは、領土になったのではなく、それらの国々を治め、従えさせたのであって、所有の地となったわけではありません。それで、バビロンに捕囚された後に、エゼキエルに対して主は、改めてイスラエル十二部族が相続する地をお見せになりました（47-48章）。これは、主が戻ってこられる時、神の国を建てられる時に実現するでしょう。

32 あなたは、彼らや、彼らの神々と契約を結んではならない。33 彼らはあなたの国に住んではならない。彼らがあなたを、わたしの前に罪ある者としないようにするためである。あなたが彼らの神々に仕え、あなたにとって畏となるからである。」

彼らとの契約を結んではならない、彼らが住んでもいけないというのは、一つに彼らに対する裁きであり、もう一つはイスラエルがその裁きの対象とならないようにするためです。これは新約時

代には、肉に従って滅んでしまうか、それとも御霊に導かれて、肉の行いを殺すかのどちらかしかないということでもあります。契約を結ぶとは、「交わる」ことを意味します。パウロがコリントにある教会に警告した言葉のとおりです。「Ⅱコリ 6:14-16 不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。神の宮と偶像に何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神がこう言われるとおりです。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」